

---

**こんな人生、変わって欲しい。**

橘鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こんな人生、変わって欲しい。

### 【Nコード】

N1202V

### 【作者名】

橘鈴

### 【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはシリーズへの転生物。  
なのはが存在しない世界からの転生。  
百合を含む場合があるので注意。

主人公の女の子が自分の人生に文句をいいつつ、頑張る物語を目指してやっぱりグダグダな物語になると思われる。

## 設定。

キャラクター設定。

アイエタ  
相枝 海音

デバイス：インテリジェント  
シヴァ

性格

面倒なことにはあまり関わりたくなく大抵のことには無関心。  
人と喋ることを苦手とし、無口。  
感情を表に出すことが苦手なため、誤解されやすい。

年齢

無印～A'sまでは、なのは達と同年代。  
s t r i k e r sからは少し変わるかもしれない。

その他設定。  
転生物。

アニメでなのはがやっていない世界。  
魔法についての事は、相方（のちに紹介）に教えられている。

ストーリー展開など。

なるべく原作通り。

s t r i k e r sは素通り。

その後をオリジナル設定で制作予定。

「そんなの聞いてないし、頼んでもない」

人生とは、面白い。

人の思考一つで左右される。

そんな言葉をよく耳にする。

しかし、私にとって、私の人生は。

苦痛でしかない。

だから、面白いという貴方、ぜひ変わってほしい。

「君が、海音さんかい？」

唐突にかけられた言葉

ああ、きつと両親がまた何かやかしたんだな、と思った。

「はい」

そう答えると男はニヤ、と笑い、態度を急変した。

「君のご両親がね、逃げちゃったから、君が代わりに借金を払ってくれない？」

世の中ってロリコンって呼ばれるものが多いですよね。

けど、私はそんなの興味ない。

しかし、断れば殺される。

断らなければ、何されるかは分かり切ってる。

さすがに中学2年生となれば、分かっています。

「嫌と答えれば、君の人生はここで終わる。承諾すれば、時期に快感になるさ」

ニヤニヤ笑いながら此方を見て、手を伸ばしてくる男。

ああ、これだから男って嫌い。

世の中、こんな奴ばかりじゃないのは知ってる。

けど、私に近づく男は皆こういう人。

だから。

もう、諦めた。

「嫌って答えるに、決まってるじゃない?」

そう言っつて男を突き飛ばして走る。

けど、きつと捕まっつて殺される。

その前にやりたいことと言えば。

少しの間、友達でいてくれた皆に感謝をしめすことくらい。

簡単に、死にたくなんてないけれど、人生っつてこういうものでしょ?

「おい、その子!危ないよ!!!!!」

ふと、声が聞こえて右を見た。

トラックだね。

ああ、これはトラックだ。

しかも大型。

まあ、あんな男に殺されるよりかは、ひき殺される方が、ましかもね。

「っっっ…」

確かにトラックと衝突したはずなのに、生きてるっていう感覚がある。

寝転がった状態で上を見上げた。

顔があった。

女の人だった。

「寝よう」

寝ようとした。

「説明聞いて」

阻止された。

「ま、そういうことだから」

何か説明された。

要約する。

- ・君の人生に嫌気がさした。
- ・そんな人生終わらせて新しい人生を歩んでほしい
- ・君の事気にいった。

という理由から。

他の世界。

私が生きていた世界と並行している、

いわば、パラレルワールド？的なところに連れて行ってもらえるらしい。

魔法が使えるみたいで、不自由はしないよう努力をしてくれるらしい。



返答？

そんなのもちろん決まってる。

こんな人生から解放されるのならば喜んで。

「YESと答えますよ」

あたりまえでしょう？

「どうして人間は傷つけることしか出来ないの」

優しく、「いってらっしゃい」と言ってくれた。

初めてに近かった。

両親は私になんて関心を持っていていなかったから。

お金を払わせる道具としてしか、見てなかった。

だからかな。

涙がずっとずっと止まらないんだ。

転生して、独りなんだって自覚したから。

ここには、慰めてくれる友達もない。

私をここに送ってくれたあの人もいない。

寂しくて、寂しくて。

涙が止まらない。

それでも、私は歩かないといけない。

私みたいな不幸な子は見たくない。

だから私は、前へ進もう。

「ほんとに、不自由はないみたい…」

びっくりするくらい広い部屋に飛ばされた。

きつと、ここが私がこれから住む所なんだろうけど。

起きた時はベッドの上だったし、近くにタオルが置いてあった。

泣くことすら予想されていたのはちょっと恥ずかしい。

さて…。

涙は拭いた。

前へ歩くことを決めた。

それならまずは、この世界がどっいつとどこか覚えるところから始めよう。

「…っと、これが地図、かな？」

机の上に置いてあった紙を見て、呟く。

「あの人がいるくらいだから、神様信じてみようかな」

神社へ向かった。

「何年ぶり、かな。神社なんて来るの」

歩いてて実感するっていうのはおかしいけれど。

どうやら、5年前に成長が戻ってる。

記憶は全部あるけど。

多分、現在小学三年生。

実年齢、中学二年生。

うん、5年くらい前であってるはず。

なんか、視界が低いな、と思ったら年齢が戻ってるのに気付いた。  
我ながら気づくのが遅すぎると思う。

たすけて

「え…?」

誰か、助けて。お願い。この子たちを

ふと聞こえた声。

幻聴じゃなく、まぎれもなく、はっきりと。

私は自然と声の聞こえるほうへと足を向けていた。

「そんなことしたって、助けなんて来ない」

男の声。

「うるさいっ。この子たちには、絶対手は出させない!」

今度は女の声。

「いい加減、諦めろ」

突然の殺気。

足が震えて動けない。

目の前で、人が殺されようとしてるのに。

っ…そんなの、絶対させない。

絶対に。

させたくないのに、見たくないのに、足が動かない。

ああ、どうして。

どうして、こんなにも非力なのだろう。



「それはこっちの台詞だ！何でお前らみたいなやつが表で生きられるんだ！どうして、被害者な私達だけ、私達だけこんな目に会うんだ！」

「君は…」

女の人が何かを言いかけた。

けど、気にも留めない。

闇雲に叫んだ。

「誰かが誰かを傷つけるなんて、私が絶対に許さない！そんなの、何も生まない。生むのは復讐という考えと、憎みだけだ！笑顔なんて生まれない！そんなことを繰り返してなんになる！！！」

私は。

私は、ただ両親の笑顔が見たかっただけなんだ。

それを。

どうして、他の奴らは傷つける。

「どうして！どうして！何で人間ってそういう考え方しかできない



んだ！！！！！！！」

本当に、どひっど。

私はいつも邪魔されるの？

「私がこんな世界破壊してやる」

何度だって、言ってやる。

覚悟は決まった。

私は。

私が。

「私が、私が…」

そう、私が。

「こんな世界変えてやる！」

「…おい、ガキ。調子乗ってるのか？」

「乗ってるね！とても乗ってると思うよ！！けど、あんたがやろうとしてるのは私が見たくないものに値する！だから邪魔させてもらう…！！」

「っち。一般人に魔法の行使はしなくなかったが…仕方ない」

そう言って、杖のようなものを出した。

何処から出した？

魔法か。

面白そうだね。

しかし、この状況。

私に、何か出来るか？

魔法すらまだ使いこなせない私が。

大丈夫。君ならできる

頭の中に直接聞こえた声に振り替える。

そうすると、すごく笑顔で私に一つの鍵を渡してきた。

それが、君のデバイス。相棒になる存在だよ

これが…。

そう。

ならば、私は受け入れよう。

相棒なんてそんなもの、今まで出来たことなかった。

嬉しくてたまらない。

それに。

相棒って、いるだけで心が安らぐ存在でしょう？

私に続いてね？

「うん」

我、破壊の力を受け継ぐ者

「我、破壊の力を受け継ぐ者」

シヴァ神とともに抗おう

「シヴァ神とともに抗おう」

世界を破壊から守る破壊者になろう

「世界を破壊から守る破壊者になろう」

『私に力を、シヴァ。 s e t u p ! 』

「…へえ、シヴァ神の力を受け継ぐデバイスがまだあるとは…」

我がマスター、装備の形状を

「え？」

マスターが思い描いた装備が貴方にぴったりの装備です

「そういうこと…」

私が思い描く装備。

そんなの想像したことなんてない。

…。

私らしく、尚且つ、動きやすい服装。

扱いやすい武器。

今まで生きてきて、どんなのが一番動きやすかったか思い出せばいい。

まず、武器を考えよう。

中距離から遠距離に使いやすい物。

刀は近距離向け。

…魔法が使えるのならそれで遠距離はカバーできる…。

と、信じて。

刀。

服装。

これは、難しいかも。

肘あたりまでの長さの袖で。

魔法！的な雰囲気の服。

下は半ズボンで、マントみたいなのがついてる感じ…。

で、いいのかな。

ロード、完了

「へえ、そこまで扱えるのか。素人だと、甘く見ない方がいいみたいだな」

「これが、私の聖装備、ね」

では、戦いましょう、我がマスター

「喜び」

「私がこんな世界破壊してやる」(後書き)

長い長い長い長いWW



「覚悟が足りる足りないってどついでいこと」(前書き)

本編突入までは、今日更新しようかと思えます。

「覚悟が足りる足りないってどついで」と

「おい、ガキ、名前を言え」

「あんたが先に言えば？」

Setupが終わった時から戦闘ははじまった。

シヴァの指示通り、魔法を展開し、ギリギリで相手について行ける状態だ。

「っは。威勢がいいな。俺の名前は秦芭アインバ、中井・T・秦芭」

「私は、相枝。相枝海音」

「へえ。相枝。お前にそいつらが救えるか？」

「救って見せる。絶対に！」

お互い会話を交えながらも、一步も譲らない状態が続く。

「そろそろ、終わらせようか」

秦芭の目の色が変わる。

「アークセイバー」

静かに、そう唱えた。

赤色の刃が海音へ向かっていく。

マスター

「分かってる！電気の刀剣を相殺するには、同じものが、それ以上の物！！」

ソードモード・ブレイズシューター

「っは。射撃なのか剣なのかはつきりしろよな！」

「そんなの知らないよ！！」

発射準備OK

「あああああああああああああああ！」

「すごい…。シヴァがあんなに言うことを聞くなんて」

「ありえない、ですか…?」

「ええ、それに近いわ」

シヴァが人の言うことを聞くことなんて今までなかった。

前の主に裏切られ、私達が傷つけられたところを見てからは。

どんなに誠実な人間であろうと。

どれだけ正直な人間であろうと、信じていなかった。

そんなシヴァがいきなりでてきた女の子をマスターと呼ぶなんて…。

「海斗ねえ…私達、助かるのですか?」

「分からないわ」

「分かるよ、分かるって。あいつの目、本気で僕たち助けようとしてくれる」

そう…。

どうして、他人である私達を助けてくれるのか。

分からない。

そして、あの秦芭という少年も。

どうして私達を求めるのか。

そこに、何があるって言うんだ。

分からない。

「はあ…ガキのくせに、どうしてそんな魔力持ってるんだよ」

「は？体力なさすぎじゃない？」

ふざけんなよ。

こいつ。

AAAランクの俺より数倍も魔力が多いなんて。

こんなガキがか？

いくら本気で戦ってないにしろ。

息一つ乱れてないなんてな…。

っは。

いいじゃん。

面白いねえ。

こいつに、託してみるのもいいかもしれない。

「おい、ガキ、よく聞け！」

「何!!！」

「お前にシヴァを託す！お前を、信じる！だから、いつか訪れる苦痛にも負けず、抗いぬいてくれ！」

「なにそれ！」

お前なら、乗り越えられる。

未来から逃げてきた俺と違って。

「お前なら、未来を救える！お前が、俺の代わりにこんな世界変えてくれ！！！！」

「な……」

「だから、餞別に、これをやる」

「っ、なにこれ」

「それは、シヴァと対になる魔導書だ。お前なら封印を解き、力を扱える」

「あんたが使えばいいじゃん」

「俺は、そいつに受け入れてもらえなかった。覚悟が足りないんだ

と

よく、分からないことを言う。

「俺じゃあ、救えなかったあの子たちを、救ってくれ。管理局、未  
来のエースのあの子たちを」

「ちょっと!!」

一方的に話して消えるって何？

というか、味方なの？

敵なの？

どっちなわけ？



「こつちでの人生は、楽しめそうだ」

「…っはあ」

体力的には疲れてはないと思う。

けれど、精神的に疲れたかもしれない。

「あ…駄目だ」

限界みたいで。

倒れる。

地面と顔面合わせるなんていやだけど。

抗う気力も残ってないから。

諦めた。

「っつと」

んだけどなあ。

「君の家は、どこ？」

「ここからギリギリ見えるあのマンション」

指をさして示してからは、意識を手放した。

「で、貴方達はここに住みたいってこと？」

「要約するとそうなるわね」

「…」

これからの生活の事を考えると、保護者の立ち位置に大人がいるし。

一人は寂しいし。

助けるって約束したわけだから。

…んー。

そう、だね。

「いいよ。…いや、ぜひお願いします」

その方が都合良いし。

「じゃ、自己紹介をするよ?」

問いかけると元気よくうなづく二人と落ち着いた感じであつなづく一人。

「私は相枝海音。多分小学三年生。ここに居る理由はいつか話すから今は聞かないでほしい」

「了解。私達には、名前ないの。さっき、この子がとっさに思いついて私を海斗と呼ぶようになったけれど」

へえ。

「理由、聞いてもいい？」

少し、どもりつつもちゃんと答えてくれる。

「え、えっと。あの、海音って言う名前で、助けてくれた人だから、借りて…。姉ちゃん、かっこいいところあるから、男の子みたいな名前でもいいかな…って」

うん。

「それでいいと思う。で、他の二人は私が付けていい？」

笑顔で聞くと、笑顔でうなずき返してくれた。

「じゃあ、僕って言って、ボーイッシュな君が夜月<sup>よつき</sup>。海斗って名前を考えた君が、愛乃<sup>よしの</sup>。で、どうかな？」

『…うん！』

双子のような二人だから、似たような名前がいいと思ってつけたけれど、気にいってくれたみたいで良かった。

家族が、3人も増えた…って自覚はないけど。

けど、うん。

これからの生活が楽しみで仕方ないのは、認めようかな。

「じゃあ、この世界について説明するわよ?」

海斗の問いかけにうなずく。

そこからは、黙って聞く。

「まず、管理局という、魔導士を育成し、管理するところがあります。そこには様々な魔導士がおり、模擬戦などの教育、勉強方面での教育、両方を行っています。」

魔導士、というのは分かると思うから説明は省くわね?

それで、今、私達がいるこの地球での問題が起きているの。

それが、ロストロギア、ジュエルシードが存在していること。

ロストロギアはとても危険な物で一般人も巻き込んでしまうの。これを回収するために一人の少年がこちらへ来ているわ。そして、そこで一人の少女が見つかるの」

海斗はそこで一息区切り、海音を見つめる。

「貴方と同じ、一般人で魔力素質が優秀な女の子。その子がジュエルシードを集めてくれているの。」

けれど、そう簡単には進まないらしいの。邪魔、と言っては駄目だけれど、妨害をしてくる女の子が居るらしい。

その子の目的はジュエルシードの回収。ジュエルシードを何に使うかは分かっていないの」

モニターをとりだし、そこに二人の少女とジュエルシードと思われる物を映す。

「海音と同じ年齢の女の子たち。この子たちは、自分たちそれぞれの目的、意思で行動してるわ。」

そこで、海音。貴方に頼みがあるの」

きつと、面倒事なんだろうと予想しながら。

それでも真剣に海斗の発言に耳を傾ける。

「この二人に介入してほしい」

ああ、やっぱり面倒事だ。

そう、小さく呟いた。

「こっちでの人生は、楽しめそうだ」(後書き)

今回はちょっと説明回です。

んー、構成が少々おかしかったり、設定がちょっとずれているかもしれない。

そこはご了承ください



「自分の力が弱すぎて、嫌悪感」(前書き)

放置すみませんでした

「自分の力が弱すぎて、嫌悪感」

「初めまして、相枝海音です。よろしくお願いします」

結局、引き受けるしか選択肢はなくて。

どっちに先に関わるかなんて、わかりきってる。

学校に通っていて、なおかつ地球育ちの高町なのは。

接触を試みようとはまだ思っていないけれど、同じクラスにいるのは大変便利だとは思う。

「じゃあ、海音さんは、えーと…なのはさんの隣、かな」

はいはい！と元気よく手を振ってくる女の子。

映像で見た彼女だった。

どこにでもいるような平凡な小学生。

それが、あんなに強いなんて。

確かに私は今小学三年生だけど…実年齢は14歳。

5歳も上なんだ。

なのに、いつだってじっと傍観者をつづけて…。

何度も思う。

『絶対に自分の世界を守り抜く』

あきらめない。

今度こそ、死ぬのを覚悟しない。

「一緒に帰らない？」

そう、声をかけてきたのは金髪の女の子で。

確か名前を、アリサ、と呼ばれていたと思う。

正直、あまり面倒なことは避けたいが目的の人物と関われるチャン

スなので乗ろうかと思う。

…それが間違いだった。

「海音ってさ、あんまりしゃべんないわね」

「そうかな？」

「そうよ」

むす、とした顔でこちらを睨んできた。

アリサは元がかわいいので特に怖いとは思わない。

なのはとすずかは笑っている。

3人には名前で！と強要されて今に至るわけだけど…。

海斗から連絡は来ていない。

もう一人の女の子の行方を捜しているようだから、時間がかかると  
思う。

「ちょっと、聞いてんの？」

多分ジュエルシールドが先に見つかって鉢合わせ、ってなると思うけど。

「海音!?!」

「...? あ、じゅん」

「...はあ、もういいわ。着いたわよ」

あー、初日からアリスを怒らせてしまったな。

少しだけ罪悪感。

「ごめん、ありがと。また明日」

そう言っつて早々と車を降りる。

そして向かうはジュエルシード。

そこで待っているのは

ピンクの魔力をまとった少女が

はたまた

黄色の魔力をまとった少女が

それとも、二人ともか…



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1202v/>

---

こんな人生、変わって欲しい。

2011年12月8日01時54分発行